



今年も全国医師会勤務医部会連絡協議会(全勤協)の時期になった。昨年は北海道医師会が23年ぶりに担当し、ギリギリまで準備したことを思い出した。全国から集まった参加者に、広大なうえ冬期には雪のため患者搬送に苦勞することを知ってもらいたく、動画を制作したり(この動画は道医ホームページにアップしたので一度見ていただきたい)、初めての試みとして翌日には若手医師企画による勤務医交流会を開催するなど、医学生や若手医師の医師会活動への参画を推進する北

## 北海道で継承していくもの

### 〜歴史から学び何を伝えるか

情報広報部副部長

藤井 美穂

北海道医師会らしい姿勢を示せたのではないかと思います。今年には長崎県医師会が担当であり、長崎大学医学部を創設したオランダ海軍軍医ポンペ氏の伝統を継ぐ地での開催に期待し参加した。2題のシンポジウムには勤務医の働き方と有人離島の多い長崎県ならではの地域医療の課題が挙げられた。シンポジストの一人、福岡博孝弁護士は「弁護士、医者、僧侶はもともとお布施をいただく」職で、労働者と呼ぶことに違和感があると切り出した。そして医師の働き方改革を進める上で、法曹界

の失敗の轍を医療界で踏んではいけないと続けた。ながさき宣言では、医師の働き方改革施行による救急医療、地域医療の崩壊の危機が書き込まれた。フロンティアであった北海道が歩んだ歴史と対照的に戦国時代以降、外国人とその文化が流入し変遷しながら明治を迎え、さらに原爆投下という激動の歴史を持つ長崎の心根を感じながら宣言文を読み直した。

長崎大学メディカル・ワークライフバランスセンター長・伊東昌子先生は、長崎大学のベテラン専門職と若い世代が協力し働き方改革を進める具体的な取り組みを示した。多忙な医療職にあるメンバーたちの会議はキッチンタイマーが鳴るまでのきっちり30分。

ホワイトボードに書き込まれた内容は議事録作成の時間節約のためスマホで撮影保存。後輩たちの指導はメール利用。朝、今日1日の目標を確認し、夕方メールでは目標とした勉強の達成度を確認する。臨床、研究は皆でデイベートすることにより、課題を明確化する。この試みで和論文数はこれまでの6倍、英語論文は4倍に増えたそうだ。長崎大学では大谷翔平選手の目標達成シートも利用している。花巻東高校1年生時代、彼は8球団からのドラフト1位指名を目標に掲げた。目標達成の

具体的項目にはスピード160km/h、変化する、キレ、人間性などが書き込まれ、これらを達成するためのさらに何重にもなる曼荼羅である。2位に大差で選ばれたMLB新人王を産み出す基礎となった教育手法だ。また、溢れる仕事を効率的に処理するために、緊急性、重要性を4コマに分類したアイゼンハワーBOAも使用しているそうだ。

もう一つ、長崎では今年7月に世界遺産となった潜伏キリシタンの歴史を知りたいと考えていた。数カ月前に運転中に流れたNHK I FMのオラシヨの通奏低音がきっかけだった。長崎県生月島で歌い継がれるオラシヨ(O r a t i o)は、バチカン図書館にも残っていない古い時代のグレゴリオ聖歌という。宗教学の皆川達夫博士が長い年月をかけてスペインのある地方で、そのルーツを発見したものだ。江戸時代、キリシタン禁制に対して表面的には仏教徒を装いつつ、密かにカソリック教を信仰し続けた潜伏キリシタンが、260年の禁教をこえて独自の信仰様式を継承しながら現在まで400年も歌い継いできた祈りで、「O gloriosa Domina(栄えある聖母よ)」のラテン語が聞き取れるという。今回訪れた浦上天主堂で、壮絶な長崎の歴史を振り返りながら、時代を超えて次世代に継承する重みを考えていた。新しい土地、北海道の歴史も150年となった。次世代に手渡すものをそろそろ形にしていきたいものである。